

藤本君文學上ノ意見ニ付テ

黑板勝美

畏友藤本君、近ゴロ、人國主義ヲ一書ヲ公ニセラレタリ、新入ノ思想ヲ以テ宗教界裡別ニ一方
面ヲ開カレタル者ノ如シ、君曰ク、佛耶儒教一モ自然ナルモノナリ、真理ニ合スル者アラズト、知
ラズ、是レ果シテ正鵠ヲ得タルモノナルカ、君ハ僅々數千言ノ下ニ、人國主義ヲ以テ、真理ニ達ス
ルノ直道ナリトス、其間頗ル熟考ヲ要スベキ者アリ、將ニ他日ヲ待ツテ君ノ高見ヲ問ハント欲ス
ルナリ、而シテ、今匆^ニ筆ヲ下シ龍南會雜誌ノ餘白ヲ借ルモノハ、君ガ人國主義中、載セラレタル
文學上ノ意見ニアリ、

余素ヨリ學淺ク識狹シ、敢テ文學ニ關シ、嘴ヲ容ル、ノ身ニ非ズト雖、君ガ文學上ノ意見ニ於テ
ハ、大ニソノ不可ナルヲ信ズルナリ、君ハ嘗ニ古來二千年我國文ノ語格文法ヲ蔑視スルノミナラ
ズ、假字格ヲ破リ、恬トシテ顧ミズ、誰カ之ヲ以テ卓見トナス者アラシヤ、若シ君ノ說ニ贊スル者
アラバ、コレ或ハ言文一致論者ノ糟粕ヲ嘗メ、君ガ亞流ヲ汲ムモノナランノミ、請フ左ニ卑見ヲ
加ヘテ、聊カ君ノ反省ヲ乞フ所アラントス、

試ニ洋ノ東西ヲ問ハズ、時ノ古今ヲ論セズ、幾十ノ邦國ニ於テ、ソノ國語ノ愈純美ニ、益々高尚
ニ發達スル所以ノモノヲ探究セバ、必ズ之ニ伴フ語格文法アリテ、ヨク其ノ美ヲ濟セルヲ見ルベ
シ、獨語ノ壯麗、佛語ノ優美、英語ノ暢達ナル、皆ソノ語格文法ニ從ヘルヲ見ルナリ、若シ之ニ從

ハザルトキハ、已ノ思想ヲ明瞭ニ、社會ニ發表スルヲ能ハザルノミナラズ、或ハ之ヲ他ニ通ズルヲダニ能ハザルベシ、是レ余輩ノ教場ニ於テ經驗スル所ニシテ、英會話ヲナスニ當リテ、往々「ヘルン」師ノ爲ニ更ニ促サル、所以ニアラズヤ、殊ニ我國現ニ言文ニ途ニ分ル、以上ハ、文章言語各ソノ法アレバ、之ニヨリ之ニ從ヒ、愈我國文學ヲシテ發達セシメテ可ナリ、何ツ之ガ爲ニ、古來我國ノ語格文法ヲ打破スルニ及バンヤ、「現今我國ノ文法語格ハ、文學者以外ノ手ニナリシモノハ知ラズ、苟モ我國文學者ノ用非ル所ノ者ハ、古來幾千年間ノ文學者ノ歌、文章ヲ統計シテ、得タルモノナルヲ知ラバ、直ニ之ヲ以テ不便ナリトシ、未ダ進化セズトシ、之ヲ打破セントスル君ノ意見ハ、果シテ妥當ヲ得タルモノナルカ、君ノ不便ナリ、進化セズトナスモノ、恐クハ君ガ我國文ノ語格文法ヲ研究セザルノ罪ニシテ、皮相ノ管見ニハアラザルカ、又タ我國ノ文典ハ、ヨク天然自然ノ法則ニ從ヒ、人ニヨク聞カセ、人ノヨク聞キワクベキ様ニ、優美ニ、上品ニ、云ヒナシタルモノヲ集メタルモノナル（コハ落合直文氏ノ說）ヲ知ラバ、時ノ古今、地ノ都鄙ヲ論セズ、苟モ文章トシ、文學上見ルベキ者ハ、ソノ語格文法同一轍ニ出ツベキナリ、吁、君ハ今ノ錯雜極マリタル言語文章ヲ矯正スルヲ力メズ、反ツテ我國體ト共ニ、二千年ノ久シキヲ得タル、國文ノ語格文法ヲ破ラントスルカ、抑モ亦タ誤レルノ甚シキニ非ズヤ、

夫レ學ハ、唯、内ニ、儲蓄スルヲ以テ足レリトナス可ラズ、必ズ之レテ、外ニ、流布セシメザル可ラズトハ、當ニ余輩ノ服膺スベキ所ノ言ニシテ、文法語格ハ、實ニ表彰上ノ曖昧ヲ避ケテ、ソノ思想ヲ明

断ナラシムルモノ、完全ニ外ニ流布セシムルモノナリ、強テソノ句ヲ艶麗ニシ、ソノ文ヲ優美ナラシメンガ爲メノミニ非ル可シ、而シテ世往々新聞等破格ノ文調ニ、浸潤セラル、ノ久シキ、却テ文法ハ無用ナリトシ、之ヲ廢棄シテ他ニ便利主義ヲ設ケ、進化主義ヲ建テントスルモノ、余ソノ意ヲ解スルニ苦ムナリ、苟モ温故知新ノ業ニアルヲ、十數年ニ及フモノニシテ、此謬見ヲ有シ、之ヲ世ニ公ニスル、好奇ノ心、君ヲシテ茲ニ至ラシメシモノナル乎、余實ニ君ノ爲メニ取ラザルナリ、

君ハ又タ、今文ヲ是非共古文様ニセントスルガ如キ人ハ、進化ノ理ヲ知ラザル人ナリト云ヘリ、然リ、余モ亦タ敢テ、當今ノ活世界ニ向ツテ、古文ヲ再興セヨト云フニ非ラズ、只古來我國ノ語格文法ニヨリテ、然ル後、文ヲ綴ルベシト云フナリ、何トナレバ、ヨク世ト推移スルハ、是レ君子ノ取ル所ナリト雖也、我國古來休言ユソ、其ノ數ヲ増加シ、外國語ノ輸入ヲ受ケ、ソノ用法ヲ廣メタレ、一般ノ語格文法ニ至ツテハ、左マテ變遷シタルモノニ非ルヲ見レバ、之ヲ守リ、之ニヨリテ、愈我國文ヲ完全發達セシムルヲ得ルヲ信ズレバナリ、見ヨ、和歌ノ如キハ、古代ノ法則、現今ニ至ルモ、更ニ變ズル所ナク、ヨクソノ精美ヲ發揮シ來リタルニ非ズヤ、素ヨリ森羅萬象ノ進化ニ於テモ、必ズ宇宙ノ真理大法ニ左右セラレテ、然ル後チ、ヨク進化スルモノナリ、既ニ我國文ノ語格文法ノ自然ニ合スルヲ知ラバ（今之ヲ説クニ暇アラズト雖少シク國文ヲ研究セバ之ヲ了知スルニ至ルベシ善合氏ノ言前ニ錄セリ）要、如何ニ達意ニアリトナスモ、之ヲ棄テ願ミザルトキハ、十

分明瞭ニ、其意思ヲ表明スルコト能ハザルヲ悟ルニ庶幾カランカ、

彼ノ獨逸文法ハ、余輩實ニソノ繁條ナルニ苦ムナリ、而シテ「しるれる」「ぎよゝて」ノ如キ大手腕、ヨク粗豪ナル獨逸語ヲ活用シテ、傑作ヲナセル者、果シテ語格ヲ破リタルカ、文法ヲ蹂躪セルモノアル乎、凡ソ各國ノ文學、皆ソノ語格文法ニヨリテ、愈發逞シ光彩ヲ放ツ、同一轍ニ出ルヲ見ルナリ、

以上ハ、君ガ意見ノ全豹、殊ニ語格文法ニ關シテ、一言セルノミ、今一步ヲ進メ、更ニ各條ニツキ高教ヲ仰ガントス、

(一) 日本主義ニ付テ、

嗚呼、余ハ君ガ漫然日本主義テフ名稱ノ下ニ、君ノ意見ヲ公ニシタルヲ憾ミ、君ガ引証シタル數例ハ、未ダ必シモ、妥當適切ナルモノニアラザルヲ見ルナリ、夫レ我國語、靈妙優美ナルハ、「てにを」ハ「活用ニアリ、故ニ」てにをハ「ナケレバ、我國文ト云フ可ラズ、若シ漢字ノミヲ以テ、ソノ意ヲ表彰セントセバ、必ズ漢文ノ格ニ從フベキナリ、何トナレバ、我國古來、支那ニ韓ト交通シテヨリ、大ニ漢文學ヲ輸入シ、奈良朝ノ如キ、ソノ極ニ達セルモノニシテ、爾來與廢定リナシト雖ヒ、ソノ我國文ノ足ラザルヲ補フテ、今日ニ至リ、上ハ公文ヨリ、下日用往復ノ手簡ニ至ルマデ、皆漢文ノ臭味ヲ帶ビザルモノナキ以上ハ、假ニ「てにを」ヲ去ルトセバ、單ニ漢文ノ力ニヨリ、ソノ意ヲ表明シ、之ヲ十分ニ通セントスル、必ズソノ語格文法ニ從ハザレバ、少ラク其意ヲ通ズ

ルヲ得ルモ、忽チニシテ、ソノ如何ナル意味ヲ有セシヤヲ、知ル能ハザルニ至ルヲ以テナリ、
而シテ、君ノ日本流トシテ引ケル例証ノ中、「人殺」ノ如キ、只「人ヲ殺ス」ノ居言スレコトダノ「人殺シ」ヲバ、
シテ略セルナリ、之ヲ二字ノ漢字ヲ以テ顯ハセルノミ、若シ「殺人」トシ、之ヲ支那流トセバ、コハ
「人殺シ」ノ意ニ非ズシテ、人ヲ殺スト云フ働作ヲ示セルナリ、強テ之ヲ名詞トセバ、殺ス人トモ
解スベク、決シテ人ヲ殺スコノ意ヲ有セザルナリ、且ツ自利ナル語ハ、漢文中常ニ見ル所ノ語ニ
シテ、余ハ未ダ「利自」ナル熟語ヲ發見シタルコアラザルナリ、如此君ノ引証ハ、却ツテソノ中君
ノ所謂日本流ノ、余ノ所謂漢字格ニ合ヘル語ト、合スルモノヲ見ルナリ、故ニ余ハ君ノ日本主義
ヲ唱フルニ、尤モ贊成ヲ表スルモノナルモ、既ニ「てにをば」ヲ去ラバ、國文ニアラズ、漢文タルベ
キモノナルヲ以テ、君ノ所謂、直書的日本主義ニ左袒スルヲ得ザルナリ、君ハ謂フ、日本人ノ胃ニ
弱キヤ、往々支那流西洋流ヲ圓飲ウチマクミニスルヨリ、病ハ益重ルノミ、是等ニハ、日本九ヲ飲マスベシ
ト、君ノ志大ニ可ナリ、然レレ、之ヲ以テ文學上ニ説ク所ノ不穩ナル者ニ至ツテハ、余贊同セント
欲スルモ、能ハザル所ナリ、君又タ曰ク、心得違ノ甚シキヤ、語ハ成可ク漢文字ヲ用井テ、顯ハサ
ントスルノ風アリ、(中略)勉メテ漢字ヲ用井、人ノ苦ムヲ見テ、得意ノ學者アルニハ閉口ト、君ノ
見實ニ當ヲ得タリ、余モ亦タ「タビ」ヲ尼袋ト書シ、「ナポレオン」ヲ奈破烈翁ト當テ書キスル等、
習慣ノ久シキ、既ニ已ニソノ意ヲ通ズルモノハ、依然之ヲ用井ルモ、妨ナカル可シト雖、新タニ難
熟語ヲ作り、借屈聲牙ナル語ヲ用井、一見人ノ見テ苦ムガ如キモノニ至ツテハ、大ニ其不可ナル

ヲ公言スルニ憚ラザルナリ、

(二) 進化主義ニ付テ、

コハ、文法語格ノ事ニ關シタレバ、已ニ前ニ之ヲ概論シタリ、君ハ文法ニ合ハザルヲモアルベシト雖、サレバトテウソニモアラズ、眞ナラザルニモアラズト云ヒ、要、達意ニアリトテ、係結必シモ必要ナラズトシ、文法語格ヲ破ルモ、只容易ニシテ便利ナル方ヲ用非ルヲバ、智者ノ取ル所トナスモ、余ハ未ダソノ智者ノ間ニ容レラル、ヲ知ラザルナリ、知ラズ、是レ退化ナル乎、進化ナル乎、

(三) 便利主義ニ付テ、

君ハ、國ノ進歩發達ハ、民力ヲ成ル可ク、有用ニ費スヲ第一トス可シト云ヘリ、是レ大ニ可ナリ、然レドモ、前ニ論シタル如ク、思想ヲ顯ハスノ方、ソノ法則ヲ破リ、ヨクソノ意思ヲ他人ニ通ズル能ハズンバ、蓋シ國ノ進歩發達望ンデ得可ラザルノミナラズ、人生ノ不幸不便、之ニ過グルモノ無カル可シ、君ノ洋字漢字ヲ退クルノ見亦大ニ可ナリ、然レモ、一般ノ國民ニ向ツテ、各國ノ語學ヲ學バンヲ望ムモ、是レ畫餅ノミ、亦タ論ズルニ足ラズト雖、當時我國文學技術發達ノ程度、未ダ西洋諸國ノ上ニ位スト云フ可ラズ、又タ文學ナルモノハ、成ル可ク廣キニ涉リ、博洽ナラザル可ラズ、ヨク他ノ粹ヲ取り、藉ツテ以テソノ美ヲ濟サトル可ラザルナリ、君ハ又假字主義ヲ取ランヲ公言セリ、然レモ、古來我國ハ、漢字ト假字ト相伴フテ、今日ニ至ルマデ我國文ノ美ヲ發

揮シタルモノナレバ、漢字ハ實ニ我文字ニ歸化セルナリ、又タ我文學ノ骨髓トモナレルモノナレバ、今ニ及ンデ、千餘年以來、用非來レル漢字ヲ全廢シテ、假字主義ヲ取ラン、所謂言フベクシテ行フ可ラザルノ論ナルベシ、蓋シ漢字ハ、既ニ我ガ文字トナレルモノナレバ、普通ノ教育ヲ受ケタル者ハ、ソノ信屈ナルモノニ非レバ、假字ト相伴フテ用チナス、徒ニ冗長ニ涉ラザルノミナラズ、充分明晰ニ、ソノ意ヲ所チ、顯ヘスヲ得ルト信ズルナリ、君ハ、今日假字ノ書方ノ多端ニシテ、不便利極マレバ、一種便利ナル記號ヲ用非ル可シト云ヘリ、然レモ、余ハ信ズ、假字格ニ合ヘル書方ハ、唯、一ナルノミト、君ノ所謂多端ナルモノハ、假字格以外ニ、君ノ如ク、各自未ダヨク假字格ヲ研究セズシテ、之ヲ不便ナリトシテ、新タニ一方ヲ設クル者多キニ、職由スルニ非ザル乎、前ニ論セシ如ク、我假字格ハ、二千年來用非來リシ法ナルヲ以テ、ソノ如何ナル所ノ、不便利ナルカヲ論究セズシテ、直ニソノ法ノ一定、嚴正ナルヲ見、他ニ一種便利ナル記号ヲ用非ルベシト云フ、余ハ賛セズ、余ハ只、尙後新聞雜誌其他著述等ニ於テ、ヨク之ニ注意シテ、ソノ誤ヲ校正セバ、或ハ漸々正格ニ復シテ、遂ニ一般之ニ從フニ至リ、至便至利ノ者トナランヲ信ズルナリ、若シ君ノ見ノ如ク、各其便ナリトスル所ノ方ヲ取ラバ、錯雜又錯雜トナリ、紛亂愈紛亂トナリ、底止スル所ヲ知ラザラントス、

君ハ、醫者石屋ノ假字、區別シ難キ場合ニハ、便利ナル方ニ「イシヤ」「イシヤ」ノ如ク一定セバ甚ダ明白ナリト云ヘリ、然レモ、此ノ如キハ、從來久シク慣習トナリ、法トナレルモノニ從ヘバ足

ル、況ンヤ、君ノ如ク、假字主義ヲ取テバ之ヲ區別シ難キコアル可キモ、之ヲ漢字ヲ以テ、直ニ醫者
 石屋ト書スルハ、一目瞭然タルヲヤ又、(ti)ヲ「テイ」ト書シ、(vi)ヲ「ヴィ」ト書スルガ如キ、既ニ一
 般ノ慣例トナリタルモノニ於テハ、余ハ唯之ニヨリテ、一般ノ法則ヲ設クレバ可ナリト信ズ、
 右ハ、實ニ君ガ文學上ニ有スル意見ヲ、余ガ淺見ヲ以テ、聊カ概論セルモノナリ、井底痴蛙ノ見、
 大ニ謬レルモノアル可シト雖、君ガ千慮ノ一失ヲ補フ所アラバ、余ノ幸、之ニ過ギザルナリ、言不
 敏ニ涉ルモノ、幸ニ咎ムルコト勿レ、

雜 錄

籠 城 日 記 (續)

城 水 生

二月廿三日賊兵段山ノ壘ニ迫リテ止マズ全方ヲ盡シテ我胸壁ヲ奪ハントス銃口相距ル互ニ三四
 間我軍頗ル苦戦ス聯隊長與倉中佐馬ヲ躍ラシテ彈丸雨注ノ裏ニ指揮ス衆交々冒險身ヲ輕ズルヲ
 諫ム中佐聽カズ尙ホ危險ヲ冒シテ進ム忽チ飛丸其胸ヲ貫キ中佐既ニ馬腹ノ下ニ落ツ鮮血噴騰ス
 衆驚テ之ヲ救護セントスレト戰正ニ酣ニシテ之ヲ教フニ遑アラズ予等塵ニ近キ其狀ヲ問フ中佐
 未ダ絶ズシテ曰ク憂フル勿レ川上在リト(川上ハ現中將操六時ニ少佐)掌ヲ以テ創口ヲ壓シ相接
 ケテ病院ニ至ル途中頻リニ朗吟ス然レト其語既ニ弁ズベカラズ數時ニシテ終ニ瞑ス蓋シ中佐ハ
 鹿島ノ人親戚故舊多ク與シテ賊中ニアリ昨曉來ノ戰鬪ニ敵中頻リニ連呼スルモノアリ「與倉來